様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５１０３４２

研究課題名（和文）近代ドイツのバックラッシュとナショナリズム

研究課題名（英文）Backlash and nationalism in modern Germany

研究代表者
姫岡　とし子（Himeoka, Toshiko）

東京大学・人文社会系研究科・教授

研究者番号：８０２０６５８１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,800,000円、（間接経費）　1,140,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ドイツのさまざまなナショナリズムのなかでも、権力国家ナショナリストと右派急進ナショナリストにとって、二項対立的なジェンダー把握とそれにもとづく社会秩序の形成が、強力な国家建設と海外進出、覇権をめざすにあたり、いかに重要であったかを指摘した。公的領域では勇気、決断力、戦闘性に象徴される「男性性」が不可欠とされ、女性は家庭で民族の再生産に専念すべきであった。こうした枠組を越えようとする運きは、徹底的な攻撃の対象となった。なかでも激しかった反女性参政権運動の理念と活動について、均質的で強力な民族共同体の形成という急進ナショナリストの目的と関連させながら明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In this paper I explained anti feministic discourses and activities of the german right wing nationalists in relation to their purposes to build up a poweful and homogeneous nation community and to gain a hegomonistic postion in Europe. Therefor they found it very important to maintain the dualistic gender system and social orders based on this system. From their point of view only the mainly state with courage, decision and fighting sprit could realize the hegemonistic position, and women should birng up children at home. At the bigging of the 20th centry women demanded for the right to vote. The radical nationalists opposed vigorously to this demand and built up powerful anti suffrage campaign. They argued; 1, emotional and unlogical women were unsuitable for politic and they should devote themselves to their natural task 2, suffrage would destroy families and bring about nation declining, 3, the participation of women in decision making prosess would weaken the state power.

研究分野：ジェンダー

科研費の分科・細目：ジェンダー

キーワード：近代ドイツ　ネイション　ナショナリズム　右翼急進ナショナリズム　バックラッシュ　フェミニズム　女性参政権　ジェンダー

１．研究開始当初の背景

1990 年以降、活発となったネイション（国民）・ナショナリズム研究の波は、歴史研究、ジェンダー研究にも及び、私の専門とするドイツ・ジェンダー史の分野でも、あらたに構築論的、文化史的、さらにポスト・コロニアルな観点からの研究がアメリカおよびドイツ・オーストリアの研究者によって行われるようになった。従来、参政権をもたない女性はネイションの範疇から排除されていると捉えられてきたが、現在ではネイションの構築にとって女性は不可欠という包摂の見解が主流となっている。ただし、歴史的なネイションは男女の非対等性を前提として構築されたので、女性は男性とは異なる方法で参加するとともに、この秩序を浸食する勢力や、ネイション共同体の他者と考えられる人びとの排除にも加担する。そのさい男女双方は、それぞれどのような居場所で、どんな役割を担い、どのようなアイデンティティを抱いたのか。

日本では、欧米のナショナリズムに関してジェンダー視点からの本格的な歴史研究はまだ行われていない。私はこれまでフェミニズム的な女性運動や労働のジェンダー史に関する研究をしてきたが、その知見をいかしながら、あらたに男女ナショナリストを中心とするフェミニズムや労働運動を批判する側の言説と実践について考察することにした。採用する枠組みは、ナショナリズムを従来の政治史研究のように解放的局面と攻撃的局面という二段階に分けるのではなく、排除と包摂という観点から捉える新しい見方で、ナショナリズムは他者の劣視と排除という攻撃性を一貫して内包するとともに、包摂される人びとには参加と平等の道を開いていく、というものである。研究開始当時、日本ではバックラッシュにみまわれていたので、女性解放に敵対的な勢力の論理構造を認識し、その女性と男性にとっての「魅力」を探ることは有益だと考えた。

２．研究の目的

ネイション・ナショナリズムとジェンダーとのかかわりを軸に、人種的純粋性（異人種排斥）の保持、ドイツ帝国の覇権拡大と女性解放阻止がどう絡み合いながら、一方ではナショナリズムが強化され、他方で女性のネイションへの参加と政治化が進んでいくのかを、反参政権運動という具体例によって明らかにする。

そのためにまず、ナショナリストにとっての性差の重要性について解明する。19 世紀後半に登場した権力国家ナショナリズム、世紀転換期以降の人種主義的色彩を帯びた急進ナショナリズム、および右派ナショナルな団体を形成して強力なネイション建設への貢献をめざしたジェンダーたち、という３つの諸勢力のジェンダー観を検討する。そして、20 世紀初頭以降の急激な出生率の低下、植民地獲得、ヨーロッパ内での覇権闘争の激化、社会主義勢力の脅威、女性解放の進展といった社会変化を視野に入れながら、ナショナリズムのなかで比重の高まった民族・人種がジェンダーや階級と相互にどのように絡み合っていたかを考察する。

次に、「性差解消」（＝ナショナリストの理解によれば女性解放）の象徴といえる女性参政権の反対運動、に取り組む。２０世紀初頭から国際的な連帯のもとで推進され、第一次

世界大戦勃発直前に頂点を迎えた女性参政権運動は、反フェミニスト勢力にとって大きな脅威となり、「女性解放と闘う同盟」まで形成された。参政権は男女平等を象徴する出来事だったため、参政権反対を表明する言説には、その陣営のジェンダー観や世界観が集約的に示されていると考えられる。

３．研究の方法

まずドイツに関するネイション・ナショナリズム研究、またそのジェンダー視点からの研究について研究動向を把握した。その後、ネイション、ナショナリズム、右翼団体、女性団体などに関する史料を、日本の図書館、ドイツの国家図書館、いくつかの文書館で収集した。収集した史料を整理・分類し、これに基づいて論文の構想を考えた。

４．研究成果

右派ナショナリストにとって、一方における戦う男性的な国家形成と他方における民族の源泉としての家族の強化と一体性は、強国ドイツを建設するために不可欠な両輪であり、男女がそれぞれの領域を分担するヒエラルヒー的なジェンダー秩序が、その基盤となった。とりわけ「女性解放と闘う同盟」を結成するようになる急進ナショナリスト勢力は、妥協なく断固として戦いつづける男性性をドイツ・ネイションのアイデンティティの核として極端にまで称揚し、男性優位を絶対視した。

それゆえ彼らにとっては、男性性が貫徹すべき領域への女性の参入など論外であり、女性は男性に従いながら家族内で産み育てるという母親業に専念し、身体的な母性と、せいぜい地域での慈善的福祉活動の実践によってネイションに奉仕すべきであった。女性参政権は、このジェンダー秩序を根底から覆すもので、社会民主党の政権獲得にも匹敵する最悪の事態と考えられ、女性運動には、家族破壊、反ナショナルな国際主義者、ボルシェヴィストなど、容赦のない言葉による攻撃が行われた。

20 世紀初頭には、ナショナルな団体での女性の活動が活発化し、政治と結びついたナショナルな女性運動が展開されるようになる。社会主義勢力の伸張やリベラル陣営および社会主義陣営での女性運動が活発化するなかで、右派ナショナル志向の女性たちは危機感を強め、女性たちが反対陣営に絡めとられないように、自分たちの発言力を強める必要性を痛感した。そのようななかで、1912 年にはすべての政党が女性党員を受け入れるようになる。第一次世界大戦前夜のドイツでは、右派ナショナルな女性たちも含め、女性の政治化はかなり進展しており、女性参政権についても遠くない将来に達成可能という段階に到達していた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　５件）

1, 姫岡とし子　「ドイツにおけるナショナリズムと女性の政治化」『メトロポリタン史学』第 9 号（2013 年 12 月）, pp.51-73.

2, 姫岡とし子　「歴史認識を変える－歴史教育改革とジェンダー」『歴史評論』No.748,

2012/8(2012 年 8 月), pp.4-11

3. 姫岡とし子　「ドイツにおけるホロコーストの記憶文化と性」『歴史と地理』No.654, 2012/5（2012 年 5 月）, pp.1-15.

4. 姫岡とし子　「２０１１年の歴史学会・回顧と展望・ヨーロッパ・現代一般」『史学雑誌』121 編 5 号（2012 年 5 月）pp.362-264.

5. 姫岡とし子　「歴史認識・歴史教育とジェンダー」『学術の動向』2011-10（2011 年 10 月）pp.48-50.

〔学会発表〕（計　３件）

1, Toshiko Himeoka, Frauenbewegung und Backlash; Japan und Deutschland im Vergleich, Frauenbewegungen und Komplexe (Geschlechterverhältnisse in Internationaler Perspektive)Festtagung für Ilse Lenz (2014 年 2 月 23 日ボーフム・ルール大学)

2, 姫岡とし子　「ジェンダー史の成果は浸透したのか？」2012 年 6 月 29 日、学術会議

3. 姫岡とし子　「歴史研究とジェンダー－近代ドイツのナショナリズムを例にして」メトロポリタン史学、2012 年 4 月 21 日、首都大学東京.

〔図書〕（計　２件）

1，三成美保、姫岡とし子、小浜正子（編）『歴史を読み替える－ジェンダーから見た世界史』大月書店、（2014 年 5 月）

2. Toshiko Himeoka, The Gendered Limits Memories in Germany, Muta/Yamamoto (ed.), The Gernder Politics of War Memory, Asia-Pacific and Beyond, Osaka University Press, 2012, 3, pp.135-156.

６．研究組織（１）（研究代表者）

姫岡　とし子（Himeoka，Toshiko）
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号:80206581